

# 日本における帰雁詠

——『源氏物語』須磨卷「うらやましきは帰るかりがね」をめぐって——

恵 阪 友紀子

- 一、はじめに
- 二、源氏歌と道真の詩
- 三、和歌の帰雁
- 四、日本の帰雁詩
- 五、中国の帰雁詩
- 六、和と漢の帰雁
- 七、終わりに

帰雁は、「春霞たつを見すててゆく雁」（古今集・春上・三一）や「見れどあかぬ花のさかりに帰る雁」（拾遺集・春・五五）のように、ようやく春になったのに帰ってしまう雁は春の景物の一つとして和歌に詠まれる。しかし、『源氏物語』須磨巻で源氏は「故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね」と詠み、雁をうらやむ。源氏詠には菅原道真の「聞旅雁」詩の影響が指摘されているが、道真詩は『和漢朗詠集』に収載される韋承慶を踏まえて詠まれている。日本では帰雁は景物として詠まれるが、中国では韋承慶詩のように左遷されて帰れない人と春に帰る雁が対比して詠まれる。源氏詠はこれを踏まえて作られている。

## 一、はじめに

和歌に詠まれる帰雁といえば、『古今集』所収の「春霞  
たつを見すててゆく雁は花なき里に住みやならへる」(春  
上・三一・帰る雁をよめる・伊勢)などが思い浮かべられ  
る。春になるのを待ち望む「人」に対して、春に背を向け  
るようにして飛び去っていく「雁」は、春の景物として欠  
かせない素材であり、『古今集』をはじめとする勅撰集で  
も春部のはじめに帰雁の歌群が置かれている。

春の穏やかな風景のなかで詠まれる帰雁歌のなかで異彩  
を放つのが『源氏物語』須磨巻で源氏が詠んだ「故郷をい  
づれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね」であ  
る。春を見すててゆく「雁」を「うらやましき」と感じる  
源氏の歌は、他の帰雁詠とは異質である。この歌について  
は、すでに『菅家後集』四八〇番「聞旅雁」の詩の影響  
が指摘されている。本稿では、道真詩のほか、唐詩や日本  
漢詩、和歌での帰雁詠との比較から、源氏歌について考察  
を加えたい。

なお、『源氏物語』本文は、『新潮日本古典文学全集』に  
よった。また、その他は特に断らない限り、歌の引用は  
『新編国歌大観』により、適宜漢字に改めた。漢詩につい  
ては『全唐詩』により、新字に改めた。

## 二、源氏歌と道真の詩

朧月夜との密会露見後、弘徽殿女御方の圧力によって不  
利な状況に追い込まれていった源氏は須磨に退去する。弘  
徽殿方をはばかってだれも源氏のもとに訪れず、わびしい  
生活を送る源氏のもとに宰相となった頭中将が訪ねる。そ  
のときに詠まれたのが「故郷をいづれの春か行きて見むう  
らやましきは帰るかりがね」である。

須磨には、年かへりて、日長くつれづれなるに、植  
ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうらら  
かなるに、よろづのことおぼし出でられて、うち泣き  
たまふをり多かり。…(略)…

いとつれづれなるに、大殿の三位の中將は、今は宰  
相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重く  
てものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、もの  
のをりごとに恋しくおぼえたまへば、ことの聞こえあ  
りて罪にあたるともいかがはせむとおぼしなして、に  
はかにまうでたまふ。…(略)…月ごろの御物語、泣  
きみ笑ひみ、若君の何とも世をおぼさでものしたまふ  
に、堪へがたくおぼしたり。尽きすべくもあらねば、  
なかなか片端もえまねばず。終夜まどろまず、文作り

明かしたまふ。さ言ひながらも、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰したまふ。いとなかなかなり。御土器参りて、「酔ひの悲しび涙そそく春の盃のうち」と、諸声に誦じたまふ。御供の人も涙をながす。おのがじしはつかなる別れ惜しむべかめり。朝ぼらけの空に雁連れてわたる。主人の君、

故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね

宰相、さらに立ち出でむこちせで、

あかなくにかりの常世を立ち別れ花の都に道やまどはむ  
(須磨巻)

季節は春、源氏のもとを訪れた宰相中将が帰るとき、空を行く雁を見て、この地にとどまらざるを得ない自分に対して、帰ることのできる雁がうらやましい、雁とともに帰る中将がうらやましいと詠む。帰る雁と人との対比は、諸注釈等で菅原道真の『菅家後集』四八〇番「聞旅雁」を踏まえていることが指摘されている。

### 聞旅雁

我為遷客汝來賓 我は遷客たり 汝は來賓  
共是蕭蕭旅漂身 共に是 蕭々として旅に漂へる身  
敲枕思量歸去日 枕を敲てて 歸去の日を思量する

に  
我知何歳汝明春 我は何れの歳とか知らむ 汝は明

### 春

道真の詩は、自分を「遷客」、雁を「來賓」とし、ともに旅人として仮にこの地へやってきた、自分が帰ることができる日はいつとも知れないのに、お前(雁)は春になれば帰るのだと歎く。

須磨で蟄居し、都に帰れない源氏に対して、帰って行く雁、さらに訪ねてきた宰相中将までもが雁とともに帰る。友と別れて取り残される源氏的心情が、太宰府に左遷されともに来た雁に取り残される道真の状況と重なり合い、別れの悲しさを引き立てる。

しかし、この場面は道真の詩によつてのみ構想されたのだろうか。また、道真はなぜこのような帰雁詩を読んだのだろうか。

### 三、和歌の帰雁

雁は『礼記』(月令)の「仲秋之月」に「鴻雁来」、「季秋之月」に「鴻雁来賓」とあるように、秋に北方のシベリアから飛来し、「季冬之月」に「雁北郷」、「孟春之月」に「鴻雁来」とあるように、春先に北に帰って行く渡り鳥である。

秋に飛来する雁は、「雲隠り雁鳴く時は秋山の黄葉片待つ時は過ぐれど」(万葉集・巻九・一七〇三・献弓削皇子歌三首)「秋風に山飛び越ゆる雁がねの声遠ざかる雲隠るらし」(同・巻十・二一三六・詠雁)や「寒蟬唱而柳葉飄霜雁度而蘆花落」(懷風藻、五二、山田史三方「五言、秋日於長王宅宴新羅客序」)「遠声驚旅雁、塞引聽林蟬」(凌雲集、四、嵯峨天皇「秋日皇太弟池亭賦」)など、和歌にも日本漢詩にも数多く読まれる。

しかし、春の帰雁は『懷風藻』には見えず、『万葉集』にも家持の歌などわずか三首が見いだされるだけである。春の雁について、小島憲之氏は『古今集以前』に、

『古今集』前後の歌には、秋の来雁と共に春の帰雁も現れる。春霞のこめるころ、日本の花を見捨てて北の国へ帰り行く帰雁を意識する歌は、やはり中国の詩、及びその影響下にある平安朝の詩のひそみにならったものといえる。

とされ、『万葉集』(巻十九)の「見帰雁歌二首」の題詞をもつ次の二首が帰雁を詠んだ早い例であり、漢詩の影響から詠まれるようになることを指摘される。

燕来るときになりぬと雁がねは国偲びつつ雲隠り鳴く

(四一四四)

春まけてかく帰るとも秋風にもみたむ山を越えずあら

めや

(四一四五)

四一四四番歌は燕が来る春になって帰る雁、四一四五番は今も帰っても秋にはまた必ず来ると、行き来する雁を詠じる。

一方、平安時代になると帰雁の歌は先に挙げた『古今集』三一番歌のように、春の景物として一般的に詠まれるようになる。

帰る雁を聞きて　よみ人しらず

帰る雁雲路にまどふ声すなり霞ふきとけこのめ春風

(後撰集・春中・六〇)

題知らず

よみ人しらず

見れどあかぬ花のさかりに帰る雁なほふるさとの春や恋しき

(拾遺集・春・五五)

ふるさとの霞とびわけゆく雁は旅の空にや春を暮らさむ

(同・五六)

帰る雁をよめる

赤染衛門

帰る雁雲居はるかになりぬなりまた来む秋も遠しと思ふに

(後拾遺集・春上・六八)

藤原道信朝臣

ゆき帰る旅に年ふる雁がねはいくその春をよそに見るらむ

(同・六九)

帰雁をよめる

藤原経通朝臣

今はとて越路に帰る雁がねは羽もたゆくや行き帰らむ（金葉集・春・二八）

春の雁は、春に帰って行く雁を詠むもので、傍線部「ふるさとの春や恋しき」「旅の空にや春を暮らさむ」「春をよそに見る」など、春を見すてて行く雁と、それを見送る人という構造の歌が多く見いだせる。また、波線部「また来む秋も遠しと思ふに」、「羽もたゆくや行き帰るらむ」のように、帰るのも命がけ、今帰ってもまた来るのが大変といった、雁を案ずる歌も見受けられる。いずれの歌も、これから花の咲く季節なのに帰ってしまうのは残念という気持ちが詠まれる。

『古今集』には、前掲の三一番歌の前に、

雁の声を聞きて越へまかりにける人を思ひてよめ  
る 凡河内躬恒

春くれば雁かへるなり白雲の道ゆきぶりに言やつてま  
し （三〇）

の歌がある。「言やつてまし」は、『史記』の蘇武伝に見える「雁信」の故事による表現で、北へ帰るついでに越に行つたあなたへの言づてを頼もうかと詠む。

同様に雁信の故事を踏まえた歌は、

三月ばかり、越の国へまかりける人に、酒たうび  
けるついでに よみ人しらず

恋しくは言づてもせむ帰るさの雁がねはまづわがやど  
になけ （後撰集・離別・一三一八）

帰る雁わがことつてよ草枕旅は家こそ恋しかりけれ

（貫之集・七六、古今六帖・家・一三三三）  
などがあり、帰る雁に伝言を託す。

また、『古今集』羈旅部（四一二）には次の歌がある。

題しらず よみ人しらず

北へ行く雁ぞ鳴くなるつれてこし数は足らでぞ帰るべ  
らなる

この歌は、ある人、男女もろともに人の国へま  
かりけり。男まかりいたりてすなはち身まかり  
にければ、女ひとり京へ帰りける道に帰る雁の  
鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ。

この四一二番歌は、雁が鳴きながら帰るのは、来たときの  
数に足らないからである、つまり、ともに帰れない仲間が  
いるからなのだろうと推測する。左注によれば、ともに人  
の国に来た男が亡くなり、自分は一人で帰る。雁も同じよ  
うに仲間を亡くしたから鳴くのかと、自分と重ね合わせて  
詠んだ歌ということになる。

『古今集』三一番歌、『後撰集』一三一八番歌、『貫之  
集』七六番歌のように、帰雁を単に春の景物として詠じる  
のではなく、言づてをするという個人的な感情が込められ

たり、『古今集』四一二番歌のように鳴き渡る雁に同情する、あるいは悲しみを託すような歌は見られるが、『源氏物語』の歌のように、帰る雁をうらやむような気持ち、雁と自分とを対比する歌は他にはあまり見当たらない。

『源氏物語』の歌に近い詠みぶりの歌は、『貫之集』に見える。

道行く人の帰る雁の渡るを見たるところ

ねたきこと帰るさならば雁がねをかつ聞きつつぞ我は  
行かまし (四七)

帰雁に対して「うらやましき」と感情を向ける源氏詠と同様に、『貫之集』四七番歌も「ねたし」、忌々しい、憎らしいという感情を詠むが、貫之歌の場合、帰る雁が憎らしいというよりは、帰り道なら雁の声を聞きながら行けるのにと、雁の声が聞けないことを「ねたし」といつている。<sup>③</sup>  
なお、この歌は屏風歌であり、実景を詠んだものではない。  
春の帰雁ではないが、雁をうらやむ歌は『万葉集』(巻六・九五四)に、

#### 膳王歌一首

朝には海辺に漁りし夕されば倭へ越ゆる雁し羨しも  
とある。朝夕に行き来する雁を見て、「倭」に帰って行く雁を「羨しも」、うらやましと詠む。「膳王」は長屋王の王子で、謀反の疑いをかけられた父とともに自害した。こ

の歌の直前の九五〇～九五三番歌は聖武天皇が難波の宮に行幸したときの歌で、九五四番歌の左注には「作歌之年不審也。但、以<sup>①</sup>類歌<sup>②</sup>便載<sup>③</sup>此次<sup>④</sup>」とあり、詠作年は不明であるが、難波宮行幸の際の歌である可能性を示している。それならば、九五四番歌は難波にいて故郷の大和を思い、大和に向けて帰る雁をうらやましと詠んでいることになる。

#### 四、日本の帰雁詩

帰雁、春の雁については、前掲の小島憲之氏『古今集以前』(第二章三「上代びとの歌」)に詳しいが、日本漢詩に詠まれた帰雁についても確認しておく。帰雁を詠じた詩は『凌雲集』に次の詩(二八番)がある。<sup>①</sup>

奉和江亭曉興、呈左神策衛藤將軍

江亭曉興に奉和し、左神策衛藤將軍に呈す

我后巡方春日晩 我が后方を巡りて 春日晩る

廻鑾駐蹕次江亭 廻鑾蹕を駐めて 江亭に次らす

水流長製天然帶 水流長く製る 天然の帶

山勢多奇造化形 山勢多く奇し 造化の形

岸上松声眠裏雨 岸上の松風 眠裏の雨

舟中火色望前星 舟中の火色 望前の星

煙霞欲曙鷄潮落 煙霞曙けむとして 鷄潮落つ

帰雁群鳴起<sup>す</sup>過汀　　帰雁群<sup>す</sup>鳴きて　　過汀を起つ

この詩は、嵯峨天皇御製の「江亭曉興」に唱和し、左神策衛藤原將軍（藤原冬嗣）に示したもの。帝の行幸の際の情景が詠まれ、自然のままの山と川の対比、松風の音と川辺の舟の明かり、そして霧のたち込める明け方に雁が北へ飛び帰る様子が続く。帰雁は春曉の景色の一つとして詠まれている。

次に、『文華秀麗集』<sup>(5)</sup>（遊覧部・六番）の巨勢識人の詩を挙げておく。

奉和春日江亭閑望一首

春日江亭閑望に奉和す　一首

浩蕩三仲□

浩蕩たる　三仲□

春晴万里天

春晴る　万里の天

園林半灼灼

園林　半ば灼灼たり

原野尽芊芊

原野　尽く芊芊たり

日煖鴛鴦水

日は煖かし　鴛鴦の水

風和楊柳煙

風は和らぐ　楊柳の煙

山光霽後綠

山光は　霽れて後緑なり

江氣晚來鮮

江氣は　晩れ来たりて鮮やかなり

遠樹繞湖小

遠樹　湖を繞りて小さし

長波接海連

長波　海に接して連なる

潮生孤嶼没

潮生じて　孤嶼没す

霧卷巨帆懸　　霧卷きて　巨帆懸く

草色洲中短　　草の色は　洲の中に短し

花香窓外伝　　花の香りは　窓の外に伝はる

婦声聞去雁　　婦声は　去雁に聞く

春響送鳴鵲　　春響は　鳴鵲を送る

流静看遊艇　　流静かにして　遊艇を看る

溪幽聽落泉　　溪幽かにして　落泉を聴く

興余日已暮　　興余りて　日已に暮れ

江月照仙眠　　江月は　仙眠を照らす

第一句に欠字はあるが、晴れた穏やかな春の日に、花が咲き乱れ、草木も芽吹き、暖かな日差しと和やかな風が吹く中、水辺の様子や鮮やかな草花の様子が詠じられる。ここでもやはり雁は第一五句に「婦声は去雁に聞く」と、春の景物として詠まれる。

『凌雲集』『文華秀麗集』のどちらの詩の場合も、雁は春の一景物であり、帰雁によって何らかの特別な感情をかき立てられているわけではない。

もう一例、『経国集』（雑詠一、八七番）を挙げておく。

五言早春一首　太上天皇へ在祚

玉律三陽始　　玉律　三陽の始め

年芳万里生　　年芳　万里に生ず

山晴銷片雪　　山晴れて　片雪銷す



地暖動群萌 地暖かにして 群萌動く

色微沙嶼草 色は微かなり 沙嶼の草

啅<sup>きつ</sup>洪柳園鶯 啅るは洪る 柳園の鶯

唯有<sup>きつ</sup>帰飛雁 唯<sup>きつ</sup>帰飛の雁のみ有りて

連連<sup>きつ</sup>回北声 連連として 北へ回る声

早春に雪が消え、草花が芽を出し、鶯が鳴き始める、そのような状況でただ雁だけが北に帰って行くと詠じられる。

「春霞たつを見すててゆく雁」「花のさかりに帰る雁」など、後の和歌に詠まれる帰雁と通じる。

## 五、中国の帰雁詩

次に日本漢詩が影響を受けた中国詩の帰雁を挙げておく。

『芸文類聚』（鳥部・雁）には梁の劉孝綽「賦得始帰雁」の次の詩がある。

洞庭春水緑 洞庭 春水緑にして

衡陽旅雁帰 衡陽の旅雁帰る

差池<sup>しち</sup>高復下 差池として 高く復た下く

欲向龍門飛 龍門に向かはむとして飛ぶ

春になると洞庭湖の水が緑に染まり、衡陽（現在の湖南省）の雁は北に帰る。高く低くばらばらに、龍門に向かうとして飛ぶと、春に帰る雁を詠む。

また、同じく『芸文類聚』（鳥部・雁）に晉の孫楚「雁

賦」に、

迎素秋而南遊 素秋を迎へて南に遊び

背青春而北息 青春に背きて北に息む

とある。唐詩では、明皇帝「春台望」に、

初鶯一々鳴紅樹 初鶯一々 紅樹に鳴く

帰雁双々去緑洲 帰雁双々 緑洲に去る

盛唐の杜甫「帰雁」に、

聞道今春雁 聞道らく 今春雁

南帰自広州 南の広州より帰ると

見花辞漲海 花を見て 漲海を辞し

避雪到羅浮 雪を避けて 羅浮に到る

とある。

いずれの句も、秋にやってきて春に帰る雁、鶯が鳴き、花が咲く頃に帰る雁が詠まれている。このような詩は六朝詩、唐詩の中に多く見いだせる。

しかし、春の情景として詠まれる一方で、帰って行く雁を羨む詩も少なくない。

たとえば、『芸文類聚』（人部・孝）には「晉劉柔妻王氏懷思賦曰」として晉の王邵之の「懷思賦」が収載される。

羨帰鴻之提々 帰鴻の提々たるを羨む

振軽翼而高举 軽翼を振りて高く挙ぐ

志眇々而遠馳 志は眇々として遠く馳せ



悲離思而鳴咽 離思悲しくて鳴咽す (前後省略)

帰鴻がすいすいと翼を羽ばたかせ高く飛んで行くのを羨ましく思い、自分は遙か遠くに離れている夫を思いやるけれど、離れているのが悲しくて鳴咽するとの意である。王邵之はこの時、夫である劉柔とは離ればなれになっていたため、夫のいる方向に飛んでいく鴻(雁)を羨ましく思うのである。ただし、この賦は、数句前に「仲秋蕭索」とあるため、ここでいう「帰鴻」は春に帰る雁(鴻)ではない。日本では帰雁(帰鴻)といえはば春のものであるが、中国では、季節に関係なく単に雁をいう場合にも「帰雁」ということがあり、秋の雁のことも「帰雁」という場合がある。

たとえば、晩唐の陳陶「鍾陵秋夜」に次のようにある。

蓬壺宮闕不可夢 蓬壺宮闕夢なるべからず

一々入楼帰雁声 一々楼に入る 帰雁の声

詩題に「秋夜」とあるため、秋に詠まれた詩であるが、「帰雁」と表現されている。なお、秋の雁を「帰雁」ということについては、楊昆鵬氏「かへるかり」と「帰雁」―和漢聯句における和漢の融合―に詳しい。

春の帰雁を羨む例としては、晩唐の李京「除夜長安作」(または李景作)の、

却羨秦州雁 却りて羨む 秦州の雁

逢春尽北飛 春に逢ひては 尽く北に飛ぶ

がある。雁は春になれば、一羽残らず北に帰って行く。しかし、自分は帰ることができないために、雁を羨ましく思うのである。

中唐の柳宗元「朗州寶常員外寄劉二十八詩見促行騎走筆酬贈」には、

不羨衡陽雁 羨ましからず 衡陽の雁

春來前後飛 春來たりては 前後して飛ぶ

とあり、春になれば雁と前後して帰ることができるので、羨ましくはないと詠まれる。

帰れない人と帰ることのできる雁の対比は、盛唐の高適「送田少府貶蒼梧」にも見える。

沈吟對遷客 沈吟して 遷客に對し

惆悵西南天 惆悵す 西南の天

…(中略)…

遠樹<sup>遠</sup>憐<sup>憐</sup>北地春 遠樹は憐れむべし 北地の春

行人却羨南帰雁 行人却りて羨む 南に帰る雁

丈夫窮達未可知 丈夫の窮達 知るべからず

看君不合長数奇 君を看れば合はず 長く数奇たり

江山到处堪乘興 江山に至る処 興に乗じて堪ふ

楊柳青々那足悲 楊柳青々として 那ぞ悲しみ足ら

む

左遷された人間は自由に帰ることもできない。「丈夫窮達未可知」の「窮達」は困窮と栄達の意であり、帰れないだけでなく、今後どうなるかもわからない不遇の身であることの不安が相まって、春には自由に帰ることのできる雁が羨ましく思われるのである。

李卿詩と高適詩はどちらも左遷された人が、帰る雁を羨ましいと詠むものであるが、直接羨ましいと言わなくても、帰る雁と帰れない人とを対比して詠む詩は多い。中唐の元稹「送嶺南崔侍御」詩に、

我是北人長北望

我は是れ北人 長く北を望む

每嗟南雁更南飛

毎に嗟く 南雁の更に南に飛ぶを

君今又作嶺南別

君今また嶺南の別れを作す

南雁北帰君未帰

南雁北に帰りて 君帰らず

(…後略…)

とあり、崔侍御が嶺南に赴任する際に贈った詩である。元稹自身もこの時は北方の故郷から離れた南の地にいたが、崔侍御はさらに南の嶺南に行くことになった。「南雁更南飛」は、元稹のいる南の方にまでやってきた雁が、自分のいる場所よりもまだに南へ飛んでいくようにすに崔侍御を重ね合わせている。崔侍御と一緒に南に向かった雁は、春には再び北に帰ることができるが、君は帰ってこないのだと歎いている。

盛唐杜甫「帰雁二首（其の一）」にも次のようにある。

万里衡陽雁

万里 衡陽の雁

今年又北帰

今年 また北に帰る

双々瞻客上

双々 客上に瞻る

一々背人飛

一々 人に背きて飛ぶ (…後略…)

万里の彼方の衡陽の雁は今年も帰っていく、旅人の上を二列に並んで、人（自分）に背を向けて飛んでくるとのこと。この詩でも帰れない自分と毎年帰る雁とが比べられている。

雁はまた、晩唐の韋莊「寄江南諸弟」に、

万里逢帰雁

万里 帰雁に逢ひ

郷書忍涙封

郷書 涙を忍びて封す

とあるように、蘇武の雁信の故事から手紙を携えるものであり、故郷や親しい人を強く連想させる。

盛唐の王建「江南雜体二首（其の二）」にも、

瀟湘回雁多

瀟湘に 回る雁多し

日夜思故郷

日夜 故郷を思ふ

とある。「瀟湘」は、瀟水と湘水のこと。湘水は洞庭湖に注ぐ川で、瀟水はその支流。そこにいる「回雁」つまり帰雁を見て自分の故郷を思いやる。

白居易「孟夏思渭村旧居寄舍弟」にもまた次のようにあ

る。

帰雁 払郷心 帰雁 郷心を払ふ

平湖 断人目 平湖 人目を断つ

殊方 我漂泊 殊方<sup>しゅほう</sup>に 我漂泊す

旧里 君幽独 旧里に 君幽独す

「殊方」は故郷以外の異郷の地のこと。帰雁によつて故郷を思う心がかき立てられ、故郷を離れて漂泊する自分と郷里にひとりでいる弟を対比し、両方の寂しさを強調する。

以上のように、中国における帰雁は、春を告げる景物であると同時に、帰る雁と帰れない人という対立を生みだす。さらには、白詩の「帰雁払郷心」、「礼記」(月令)の孟冬に「雁北郷」とあるように、故郷向かつて帰る春の雁は、郷愁をかき立てるのである。

須磨で源氏が詠じた「故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね」の歌は、雁と同じように帰りたい、雁に対して「うらやましきは」というのであり、唐人の雁に対する思いとよく通じる。

帰雁と人との対比は、日本でも意識されている。『和漢朗詠集』秋部の冒頭には次の詩がある。

万里人南去 万里 人南に去る

三秋雁北飛 三秋 雁北より飛ぶ

不知何歲月 知らず 何れの歳月にか

得与汝同帰 汝とともに帰ることを得む

作者韋承慶が南中(嶺南地方)に左遷されたときの作で、万里のかなた、人(私)は南にやってきた、秋には雁が北から飛んできた。いつの日にか、(春になったら帰る)お前(雁)と一緒に帰ることができたらどうかの意である。

この詩は、第三句「不知何歲月」と、自分が帰る日はいつもわからないと詠み、第四句で雁を「汝」と呼んでおり、道真「聞旅雁」詩はこの詩を踏まえて詠まれたものである。道真も紫式部もこの詩を十分理解していたと考えられる。源氏の歌は道真の「聞旅雁」詩からだけではなく、中国漢詩での雁を踏まえた上で作られている。

## 六、和と漢の帰雁

『和漢朗詠集』三一七番の詩のように、雁と人、郷愁をかき立てる雁が意識されながらも、日本の詩歌に詠まれた帰雁は、ほぼ春の景色であることはすでに確認したとおりである。なぜ日本ではそのような詠み方がなされないのか。和漢の詩歌を項目ごとに並列した『和漢朗詠集』の秋部「雁付帰雁」を挙げておく。

雁付帰雁

万里人南去、三秋雁北飛。

不知何歲月、得与汝同帰。

文選

尋陽江色潮添滿、彭蠡秋声雁引來。

劉禹錫

四五朶山粧雨色、兩三行雁点雲秋。

杜荀鶴

虚弓難避、未抛疑於上弦之月懸。

奔箭易迷、猶成誤於下流之水急。

江相公

雁飛碧落書青紙、隼擊霜林破錦機。

菅

⑩(碧玉装竿斜立柱、青苔色紙數行書。

菅)

雲衣范叔羈中贈、風櫓瀟湘浪上舟。

後中書王

秋風に初かりがねぞ聞こゆる

誰がたまづさをかけて来つらむ

友則

山腰帰雁斜牽帯、水面新虹未展巾。

都在中

春霞立つを見捨ててゆく雁は

花なき里に住みやならへる

伊勢

『和漢朗詠集』では、秋部に「雁付帰雁」の項目がおかれ、秋の雁と春の帰雁が一つにまとめられている。冒頭「万里人南去」から「秋風に」歌までが雁、後半二首が帰雁の詩歌である。「雁付帰雁」の構成と冒頭「万里人南去」の詩句については、拙稿「『和漢朗詠集』の雁―三一七番韋承慶の詩をめぐって」<sup>⑪</sup>に述べたので、ここでは詳しくは触れない。

冒頭の「万里人南去」は、粘葉本では出典を「文選」とするが、正しくは初唐の韋承慶の詩である。また、第二句の「三秋」は、『和漢朗詠集』諸本のほか、『全唐詩』など

でも「三春」とするものが多いが、ここではそのまま「三秋」の本文で解してみる。

韋承慶詩は、秋に自分とともに来た雁を見ながら、春に帰る雁を思つて作られたものである。見ているのは秋の雁だが、強く意識されているのは春の帰雁である。

『和漢朗詠集』の配列では、友則の「秋風に」歌までが秋の雁、後半二首が春の帰雁となっている。秋の雁と春の帰雁の両方を詠む韋承慶詩は、友則歌の後に置かれるのがふさわしいように感じられるが、管見の限り『和漢朗詠集』諸本ではいずれも韋承慶詩を冒頭に置く。なぜ冒頭に配されるのだろうか。韋承慶詩以外の内容を見ておく。

二首目「尋(潯)陽の江の色は潮添ひ満てり、彭蠡の秋の声は雁引き来たる」では、秋の到来を告げる雁をよみ、次の「兩三行の雁の雲に点ずる秋」と雁が飛んでくる様子をよむ。さらに江相公の序では空を飛ぶ雁が上弦の月を弓と見間違え、水の流れを矢に見間違うと詠んだもの。道真の「雁碧落に飛んで青紙に書せり」「青苔の色紙は数行の書」はともに空を飛ぶ雁を、青い紙に字を書いたようだとする。後中書王の詩句と友則の和歌は、范睢や蘇武などの故事を踏まえて詠まれた詩歌である。帰雁の二首は、「山腰帰雁」は飛ぶ雁を帯に見立てた情景詠である。どの詩歌も、秋や春の情景または故事を踏まえて詠まれたもので、

韋承慶詩などにみられる、雁に取り残される人、左遷を連想させる詩は採用されていない。

日本の帰雁詩ではもっぱら景物として詠まれたため、中国詩のような帰雁の詠み方はそぐわなかったと考えられる。道真詩以外の日本漢詩においても、帰雁に思いを託すものが全く見られないわけではない。『文華秀麗集』（贈答部）の、坂上今継「和渤海大使見寄之作一首」の「長天去雁催帰思、幽谷来驚助客啼（長天雁去りて帰思を催し、幽谷驚来たりて客啼を助く）」や渤海使王孝廉の「従出雲州書情寄両箇勅使一首」の「南風海路連帰思、北雁長天引旅情（南風海路 帰思連なる、北雁長天 旅情を引く）」など、渤海使とのやりとりで旅情を故郷への思いや旅情をかき立てられるものとして詠まれるが、それでも杜甫詩の「一々背人飛」や元稹詩の「南雁北帰君未帰」、道真詩の「我知何歳汝明春」のような、雁への強い羨望は詠み込まれていない。

このような状況から、韋承慶の詩も敢えて帰雁ではなく、冒頭に置くことで帰雁と人との対比を薄れさせ、景物として秋に来て春に帰る雁として採用したと考えられるのではないだろうか。秋来春帰の雁であれば、『文華秀麗集』（贈答部）の坂上今雄「秋朝聴雁、寄渤海入朝高判官积録事一首」に「不如関隴雁、春去復秋来（如かず 関隴の雁、春

去りて復た秋来る）」のように詠まれ、行き来する雁が多く詠まれる。

## 七、終わりに

帰雁は、『古今集』以降の勅撰集には必ず春部に歌群が置かれることから、春の景物として欠かせないものであった。しかし、あくまでも日本の詩歌において、帰雁は春の訪れを感じる一景物であり、中国詩のような帰る雁と残される人との対比では詠まれてはいない。

春の帰雁ではないが、行き来する雁をうらやましいと詠む歌は『万葉集』九五四番歌があるが、ほかには見いだしがたい。そのため、道真の「聞旅雁」や『源氏物語』須磨巻の源氏詠は、日本の帰雁の中では異質さを感じるが、中国での帰雁の詠み方としては一般的であった。

源氏の「故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきは帰るかりがね」は、道真の「聞旅雁」のみならず、帰る雁と帰れない人との対比から生まれる帰雁への羨望、故郷への思いを詠む帰雁の性質をうまく利用した歌である。

宰相中将が須磨の源氏のもとを訪れる季節を春先にすることで、源氏の悲しみを引き立たせる場面設定がなされている。

(1) 『礼記』(月令)の「孟春之月……鴻雁来」には、鄭玄の注に「雁自南方来、将北反其居」とある。また、「来」の字は、『周易』(雜卦)の「萃聚而升不来也」に「来、還也」との注がある。孟春の「鴻雁来」の「来」は帰る、もといた場所に戻るの意である。

(2) 小島憲之『古今集以前』(塙書房・一九七六年)

(3) 『貫之集』四四番歌の詞書に「延喜十五年の春、斎院の御屏風の和歌、内裏の仰せによりて奉る。女ども滝のほとりにいたりて、あるは流れ落つる花を見、あるは手をひたして水に遊べる」とある。

(4) 『凌雲集』の引用は、小島憲之『國風暗黒時代の文學下I』(塙書房・一九九一年)に依った。なお、本文校訂がされている語については\*のみを付したが、本稿の主旨に関わらない校訂については一々触れなかった。

(5) 『文華秀麗集』の引用は、岩波日本古典文学大系に依った。

(6) たとえば、張衡(平子)の「南都賦」には「帰雁鳴鵒、黄稻蠡魚、以為芍薬(帰雁鳴鵒、黄稻蠡魚、以為芍薬と為す)」とあり、「芍薬と為す(味を調える)」ということからここの「帰雁」は食材としての雁である。雁は渡り鳥であり、行き来することから「帰」といつている。

(7) 楊昆鵬氏「かへるかり」と「帰雁」―和漢聯句における和漢の融合―(『国語国文』二〇〇七年二月・第七十六卷第二号)

(8) 『和漢朗詠集』の本文は粘葉本により、返り点は私に付し、和歌には適宜漢字をあてた。粘葉本には漢詩の作者などの誤りもあるが、そのままに示した。

(9) 「三秋」は、粘葉本・伊予切以外には「三春」とある。

(10) この詩句は、粘葉本・伊予切にはないが、多くの諸本に存するため、関戸本によって補っておく。

(11) 『和漢比較文学』第三十二号・二〇〇四年・和漢比較文学会